

LNG 産消会議 2015 に参加して

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
常務理事 首席研究員
小山 堅

9 月 16 日、東京において、LNG 産消会議 2015 が開催された。本会議の第 1 回は 2012 年で、以降年 1 回の開催で今回の会議は 4 回目となる。会議の主催者は経済産業省及びアジア太平洋エネルギー研究センターであり、主催者を代表する宮沢経済産業大臣の他、カタールのアル・サダ・エネルギー工業大臣、着任したばかりの IEA 新事務局長ビロル氏など閣僚級参加者、LNG 関連企業のトップ等も含め、50 以上の国・地域から、1000 人以上の参加者が集い、LNG 市場の発展のため様々な課題を議論する場となった。

会議では、オープニング・基調講演に続き、5 つのセッションでの議論が行われた。第 1 セッションではガス・セキュリティ、第 2 セッションが LNG 供給の見通しと生産者の対応、第 3 セッションが LNG 需要の見通しと消費者の対応、第 4 セッションが新たな LNG 需要、(交通用) 燃料としての天然ガス、第 5 セッションが非在来型ガスの開発、といずれも今後の LNG 市場の健全な発展にとって重要でタイムリーなトピックを扱う議論が行われた。紙幅の関係もあり、これらの議論の全てを紹介することはできないため、会議全体の印象と特に筆者にとって興味を引いた論点を中心に、以下、ポイントを整理する。

第 1 には、4 回目となる産消会議・対話ということで、本会議の位置付けの確立が進み、かつ関係者の議論・ネットワークの深まりが着実に進展していることを感じた点を挙げたい。2012 年の第 1 回会合は、世界最大の LNG 消費国である日本の呼びかけで会議が始まったものの、この会議の位置付けや開催国である日本の狙い等について、参加者の中にはまだそれを掴みきれていない、という点での落ち着きのなさ、あるいは警戒感といったものも存在していたように思われる。特に、当時は震災後のエネルギー需給環境で電源構成における LNG のシェアが大きく高まり、同時に原油価格高騰期で LNG 価格も 100 万 BTU 当たり 16~17 ドル程度に高止まりしていたことから、いわゆる「LNG アジアプレミアム問題」への関心が日本及びアジアの LNG 消費国の間で非常に高く、供給国・者にとってはこの会議がどのような性質を持つのか、神経を尖らさざるを得ない状況があったといえる。

もちろん、本質的には、LNG の買手と売手の間で利害が衝突することがあるのは不自然ではなく、買手の間でも、そして売手の間でも、競争や利害のぶつかり合いが起こることはままあることである。しかし、第 2 回、第 3 回と会議を重ねる中で、LNG が世界のエネルギーミックスの中でより大きな役割を果たし、LNG 市場が健全に、着実に発展していくことは産消双方の立場にとって望ましいことであり、そのために双方でどのような課題を乗り越えていく必要があるのか、という基本的な議論のスタンスが明確になるにつれ、会議の位置付けと意義が参加者の間でしっかり浸透してきた。その意味で、4 回目の本会合で

は、課題解決を目指す建設的で充実した議論が十分に展開されたように筆者には感じられた。また、この会議が定着し、世界の主要な LNG 関係者が多数集まる場として認知されることで、会議での議論と並行し、関係者のネットワーキングの場としても重要な機能を持つようになっていく、という点も実感した。

第 2 に、上述の点とも関連するが、今回の会議では、低原油価格環境下で LNG 問題を議論する初めての場となったことから、産消双方の立場から、新たな、そして不透明感の非常に高い市場環境下で LNG 市場の更なる発展をどう考えるべきか議論する結果となった。過去 3 回はいずれも原油価格およびアジアの LNG 価格が高止まりしていた時期での会合であり、今回は原油価格が 40 ドル台そしてアジアの LNG 価格が 10 ドルを大きく割り込むという意味で、全く様変わりした市場環境下にある。また、中国での予想以上の LNG 需要の低迷や米国・豪州からの供給拡大見通しの中で、当面はアジアの LNG 需給が緩和基調を維持・継続すること、原油価格も当面は低迷が続く可能性が高いこと等から、買手・消費国の立場にとっては「好ましい」状況が眼前に広がっている。逆に、売手・供給国にとっては「厳しい」環境となるわけで、その中で、合理化・コスト削減・競争力強化をどう図るかも課題となっている。

しかし、今回の会議の中で感じられたのは、現在の市場環境がどこまで続くのか、将来の読みは非常に難しく、むしろ現在の低価格環境が次に振り子を逆方向に大きく振らせる可能性があることをも意識した議論もあったことである。高すぎる価格が望ましくないことは自明であるが、過度に低すぎる価格にも「光と影」がある、という認識であろう。その点において、LNG 市場が中長期的に健全に、安定的に発展する産消双方にとって望ましい市場環境とは何か、という問題意識が存在した点は注目に値する点であった。

第 3 に、その産消双方の利益に適う LNG 市場の発展に向けて、具体的な対応について様々な議論・提案が行われた点を挙げたい。論点は多数あるが、筆者にとって興味深かったのは、LNG 市場の柔軟性を高めていくことの重要性については、それなりの共通認識が成立しつつあるように感じた点である。需要サイドでの不確実性の高まりを考えると、この問題に対応することはある意味で「マスト」となりつつあり、供給者もそれに対応する必要があるという点を十分に理解しつつあるのではないかと、この印象を持った。

また、今回の会議で新たな 이슈として取り上げられたガス・セキュリティ強化の問題も重要である。安定的な契約関係をベースとした従来型のセキュリティ確保の概念に加え、市場柔軟性拡大がセキュリティ強化につながるなどの新しいコンセプト、そして緊急時対応能力強化に向けた取組等が指摘され、産消双方で考えるべき重要課題となった。来年の G7 を主催する日本にとって、この問題はエネルギーの観点で重要なポイントになるだろう。

最後に、将来の不確実性が高いがゆえに対話が重要であり、その一環として、市場の需給見通し等に関する関係者の意見交換の強化・深化の重要性が指摘されたことも印象に残った。石油市場における産消対話でも同様のアプローチが取られ、建設的な対話促進につながる例があることを考えると、今後この取り組みも重視されていく可能性があるだろう。本会議の議論を踏まえた、LNG 市場の発展に向けた様々な取組の実践に期待したい。

以上